

修士論文概要

テストに対する認知的方略がテスト不安と学習行動に及ぼす影響

上野 文裕

1. 問題と目的

テスト不安とは、学業テストや知能テストなどの評価を含む課題に対して生じる不安である（森田・福屋・船越,2017）。

一般的に、テスト不安は「テストで良い成績を取るのに必要な反応を妨害する不適切な反応」（Mandler&Sarason,1952）とされる。しかし、防衛的悲観主義者は、これから行う課題に関して悲観的に考えるために、対応策を十分に考えて臨み、結果として高いパフォーマンスを示すと考えられている（外山,2005）。実際、テスト不安の高い者の少なくとも一部は、不安だからこそ学習行動をむしろ多く行うという対処をしていることも示唆されている（岡田,2004）。

このように、テスト不安が個人に与える影響が異なる以上、不安への反応の違いも考慮した上での支援が必要となるであろう。その反応として、テスト不安状況下での学習行動も重要な指標である。

その個人差を識別する指標として、前述の防衛的悲観主義をタイプの一つとして持つ認知的方略がある。これは、「問題状況に直面した際に、人が行動や目標に向かうための認知・予期・期待・努力の一貫したパターン」

（Norem,1989）である。テストや学業に対する認知的方略は過去のテストに対する肯定感の高低と将来のテストパフォーマンスに対する期待の高低により 4 タイプに分けられる。一つ目が「過去：高×将来：低」という組み合わせの、先述した防衛的悲観主義（Defensive Pessimism、以下 DP）、2 つ目は「過去への肯定感：高×将来へ 期待：高」の方略的楽観主義（Strategic Optimism、以下 SO）、3 つ目が「過去への肯定感：低×将来へ 期待：低」の真の悲観主義（Realistic Pessimism、以下 RP）、4 つ目が「過去への肯定感：低×将来へ

期待：高」の非現実的楽観主義（Unjustified Optimism、以下 UO）となる。

学習行動・認知的方略という 2 側面から、テスト不安を捉えることを目的とする。そのために、認知的方略尺度の 4 パターンごとのテスト不安の高さと学習行動のあり方を調査、群間で比較・分析する。

2. 方法

(1) 倫理的配慮

回答は任意であること、無記名回答のため個人が特定されることはないこと、取得したデータは統計的に処理し他の目的では用いないこと、個人情報の取り扱いには厳重を期すことを文面と口頭の両方で調査対象者に説明した。

(2) 参加者

本大学の学部生 101 名

(3) 手続き

2023 年 10 月末から 11 月上旬にかけて、大学学部生の複数の授業の時間内に forms を利用し、原則としてその場でスマートフォンによる回答を依頼した。時間内に回答が終わらなかった者には期限を設け、後日、収集した。

(4) 使用尺度

1. テスト不安尺度：荒木（1988）の青年版テスト態度検査（Test Attitude Anxiety Inventory、以下 TAI）の日本語版。20 項目 4 件法、2 因子
2. 認知的方略の分類：荒木（2008）の防衛的悲観主義尺度を用いた。24 項目 6 件法。4 因子本尺度のうち、過去のテストパフォーマンスへの評価（以下、過去肯定）と、将来のテストに対する悲観度（以下、悲観）を使用した。
3. 学習行動尺度：光浪（2010）の学習行動尺度を使用した。17 項目 4 件法 1 因子。

3. 結果

悲観主義タイプ（DP 者と RP 者）は、過去に対する認知が肯定的か否定的かにかかわらずテスト不安が高い値を取った。一方で、楽観主義タイプ（DO 者と RO 者）は過去認知にかかわらず、テスト不安が低かった。

学習行動に関しては、同じ悲観タイプでも、DP 者と RP 者では前者は学習行動得点が高く、後者は低かった。

Table1 テスト不安と認知的方略の記述統計

グループ統計量

認知的方略タイプ		N	平均値	標準偏差
テスト不安	DP	25	48.280	12.581
	SO	19	29.579	6.850
	RP	28	52.750	13.184
	UO	17	32.824	9.882

Table2 学習行動と認知的方略の記述統計

グループ統計量

認知的方略タイプ		N	平均値	標準偏差
学習行動	DP	25	43.000	7.047
	SO	19	45.421	8.520
	RP	28	35.214	8.239
	UO	17	33.000	13.091

4. 考察

過去のテスト・学業に対して肯定的に認知する群は、悲観的か楽観的にかかわらず十分な学習をしており、過去のテスト・学業パフォーマンスを否定的に捉えている学生は、学習をしない傾向にあると考えられる。これにより、過去に対する認知が肯定的か否定的であるかが、学習するか否かに関わっていると言える。

テスト不安が高いことがメリットとなっている者がおり（DP 者）、逆にテスト不安が低いことがかえってデメリットになっている例（UO 者）が存在することは、テスト不安

や学習行動を支援する上で大きな示唆を与えられるものと思われる、研究の主要な目的の一つを達成できたと考える。

また、過去の試験で良い成績を収めてきたと認識している DP 者と SO 者は、いずれも学習を十分にしている傾向があることから、テスト不安にアプローチするより、安定して学習行動にアクセス続けられるように支援する方が有効であると考えられる。

5. 主要引用文献

荒木紀幸 1988 青年版テスト態度検査 (TAI) の標準化に関する研究：尺度の信頼性、妥当性の検討 日本教育心理学会総会発表論文集, 30, 480-481

Mandler, G., & Sarason, S.B. 1952 A study of anxiety and learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 166-173.

森田愛子 福屋いずみ 舩越咲 2017 中学生のテスト不安および自己効力感と学習行動との関連 学校心理学研究, 17, 45-57

Norem, J.K. 1989 Cognitive Strategies as Personality: Effectiveness, Specificity, Flexibility, and Change D.M.Buss & N. Cantor (eds), *Personality Psychology. Personality Psychology Recent Trends and Emerging Directions*. 45-60. New York Springer,

岡田佳子 2004 テスト不安と学業成績の関係の再検討 学術研究教育心理学編, 52, 29-40.